

尾張旭市内で「棒の手」に携わっている方のお話

私は、小学校1年生から「棒の手」をやるようになりました。始めたきっかけは、父親が祭りの時、生き生きと演技している姿を見たり、棒の手のことを楽しそうに話しているのを聞いたりして、自分もやってみたくなったことです。

子どもの頃は、同じ地域に住む友達がたくさんいて、一緒に練習したり、祭りでは緊張しながらも多くの人の前で練習の成果を発揮したりすることが、とても楽しく感じました。また、大人になってからは、自分の子どもと一緒にやることで親子の会話が増えたり、みんなが互いの仕事の都合をなんとかつけて集合し、練習に取り組むことで、地域の仲間たちとぐっとまとまったなあという一体感を感じたりと、とても充実した時間を過ごすことができます。

棒の手保存会に入っている人の数は、最近、激減しているとまではいきませんが、それでも以前に比べ、だんだん少なくなっています。特に子どもたちの人数が減っています。私が子どもの頃は、私の地区(分会)の子どもだけで80人ぐらいいましたが、今はずいぶん少なくなっていました。

私は、「棒の手」という尾張旭の伝統文化を通して、この地域の子ども同士が、多くの人と関わりをもって、楽しい思い出をつくってほしいと思います。そして、地域のつながりを実感してほしいと思います。大人になった時、たとえこの地を離れて暮らすことになったとしても、ふるさとっていいなと思い出してほしいと思います。生まれ育った自分のルーツを誇りに思ってもらいたいと思います。

ぜひ、「棒の手」がそんな存在になってくれるといいなと願うばかりです。

—参考—

【棒の手について】 尾張旭市の棒の手は、5流派いづれも無形文化財(県)となっており、各地区の神社へ奉納されます。私の所属しているのは、旧新居村にあり、今残る7分会のうちのひとつです。

＊ 7分会:郷(西浦、寺田、明才切、木の本など)・西・西大道・東大道・北原山・南原山・

大久手(大久手、出屋敷)

【減少の理由】 子どもが祭りに参加するようになったのは、戦後のことのようにです。子ども同士は楽しく参加しますが、裏方で働く親にも役割があったりします。残念なことです。子ども会などと同様に、親の都合を調整することが難しく参加できない子もいます。そのような家庭の子を、町内会でバックアップする分会等もあり、いろいろな保存の取り組みを今後も続けていくつもりです。